

高井一の

中部に活!

インタビュー 高井 一 (東海テレビアナウンサー)

三重県知事

鈴木 英敬 氏



「実はそれ、ぜんぶ三重なんです！」幸福実感日本一へ

寂しがり屋ゆえの目立ちたがり屋

高井 兵庫県のご出身で、灘中、灘高から東大へと進学されていますね。体型を拝見するとスポーツにも秀でておられるようにみえますし、小学校の時の夢が総理大臣だったと伺いましたが、よく言う文武両道だったのでしょうか。

鈴木 いえいえ、大学に入る時は一浪もしましたし、最初から何でもできる子では決してありませんでした。今に至る私の原点として子供時代を形容するなら、「寂しがり屋ゆえの目立ちたがり屋」

だったということでしょうか。

高井 寂しがり屋ゆえとは、どういうことでしょうか。

鈴木 親が共働きの一人っ子だったので、根が寂しがり屋の甘えん坊なんです。今の私からは想像もできないでしょうが、小学校の通知表のコメント欄にはよく「泣き虫をやめましょう」と書かれました。寂しがり屋だから、誰かに構ってもらいたいわけです。そして、どうせ構ってもらおうなら、いいことをして目立って構ってもらおうと。そういうちゃっかりした考えを持っていたので、目立

つことが好きだったんです。高校時代は生徒会長もやりましたし、いろんな場面においてグループのリーダー的な立場になることが多かったですね。小学校の時の夢が「総理大臣」だったのも、何かしら崇高な精神を持っていたわけではありません。テレビを見ると、当時の総理大臣だった中曽根康弘さんが度々登場し、レーガン、サッチャー、ミッテラン、コールといった各国の首相と対等に肩を並べ談笑している。その様子に、「総理大臣は格好いい。テレビにもたくさん出られる。よし、総理大臣になろう。」と単純に思ったのです（笑）。もっとも、そこから総理大臣や政治家について関心を持つようにはなりませんが。

就職面接で問われた 行政改革とボンカレーの関係

高井 そうすると、やはり、大学を出て官僚の道を選ばれたのは、ゆくゆくはという思いがあったわけですか。

鈴木 いいえ、それも実はまったく違うのです。政治家に関心を持ったといっても子供のころの一過性のもので。大学3年生で就職活動が目前の課題になった時、時代は、山一証券の破たんなどもあった就職氷河期の真っただ中。そういったなかで、自分としては何をやりたいかを考えたのだけれども何も思いつかない。そこで、「自分にとって幸せとは何で、どういう人生を送りたいのか。」と自分に問うたんです。「面白い面々と何かを成し遂げる」というのが、これまでの人生において楽しかったことだったなど。高校の体育祭、大学のサークル活動をはじめ、いろいろなことを面白い仲間と成し遂げてきた。やはりこれからも、そうありたい。それなら、就職活動は「面白い人探し」をしようと思ったわけです。民間企業もほとんどの業種を受けましたし、公務員関係も幅広く活動しました。その結果、一番面白い人がいて、こういう仲間と仕事がしたいと思ったのが、たまたま通商産業省（現経済産業省、以下通産省）だったというわけです。

高井 通産省にそんな面白い方がおられたのですか。

鈴木 面接官だった人がまさにそうだったのです。姫路市の淳心学院の出身者で、面接時の開口一番が、灘高出身の私に「おい鈴木、オレは灘高が一番嫌いや。じゃあ、面接を始めるぞ」と。まあ、それはジョークとして、お役所だから、面接の内容はまじめだろうと思っていたら、「面白いことを4つ言え。」という質問が飛んできた。それに対し何を話したかは忘れましたが、全然受けなかったことだけは覚えています。そして行政改革の担当だった彼はこう言ったんです。「行政改革とボンカレーの関係を述べよ。」と。高井さん、わかりますか？

高井 話がすぐに通る、物事をすぐやる、といったことでしょうか。

鈴木 スピード感ということですよ。私も同じようなことを答えたと思うのですが、実は全然違ったのです。彼は「『おせちもいけどカレーもね』というボンカレーのCMを知っているだろう？ボンカレーが発売されるまでは、正月はおせちを食べなさい、これしか食べられませんよという供給者側の論理で物事が進んでいた。それが、ボンカレーが出たことによって、カレーが食べたい人は食べられる。つまり、行政改革とは、こういう政策しかできない、こういう政策しかないというのから、国民の側がこういう政策をつくってくれという体制に変えることだ。それこそが行政改革である。」と。

高井 なるほど。非常に大事な本質を、わかりやすく語られたのですね。

鈴木 ええ。「この人、面白い！」と強く惹かれました。ただ、冷静に考えて面白い人が一人いるだけではだめだと。そう思いながら内々定の集まりに行くと、そこにいた21人が、全員違うキャラクターだったのです。組織としてこれは本物だと思いました。私と同じようなタイプが21人いたら、組織は成り立ちません。違う価値観を拾い出し、それらが融合するなかで物事を成し遂げていくというのが本物の組織です。若造ながらそんなこと

を思い、通産省に入ったのです。そうそう、もう一つ、大事なことを言っておかないと。この一連の話には後日談があって、実はこのCMは、ボンカレーではなくククレカレーのもの。2年後に気づき、「ボンカレーちゃいましたよ」と、きっちり関西弁で当の面接官に伝えました（笑）。

人は仕組みに依存する。 良き仕組みをつくる政治の道へ

高井 その通産省で、実際に成し遂げられた面白いこととは。

鈴木 いろいろありますが、特に印象深いのは「特区」という制度ですね。このプロジェクトのメンバーの一人として、全国100カ所以上を回り、具体的にどういう規制が障害になっているのか、あるいはこういう制度ができたならどういうことをしようと考えているかなどを聞き取り調査しました。当時の小泉政権で、官から民へ、国から地方へという流れのなか、補助金に頼るのではなく、規制を緩和することで地域を活性化していこうと熱く燃えて取り組みましたね。この時に、全国のさまざまな地域の人たちとひざを突き合わせて語り合ったことが、今の自分の大きな糧になっています。

高井 非常に充実した通産省での仕事の日々だったように思いますが、10年間勤務された後、当初の予定にはなかった政治の道へと歩まれたのはどういうきっかけがあったのでしょうか。

鈴木 一度目の安倍内閣の発足時に、1年間、官邸に出向し、教育再生などを担当していました。当時、安倍総理はゆとり教育の見直しをやると燃えておられた。しかし、文部科学省の人たちが、反対する。会社でいうと社長がやるぞと言っているのに、国民のニーズもあるのに、官僚が政治家の足を引っ張るとは何事だと情けなかった。合わせて、自民党の政権末期で政治家の多くが、自分たちで政策立案などをせず、地元でお祭りに出た

り葬式に出たりと選挙につながる活動ばかりしている。国民から政策をつくれ、法律をつくれと負託を受けたにも関わらず、その仕事は、まさに官僚に丸投げ状態。この状態はどう考えてもおかしいと思ったのです。

高井 それを変えたいと思われたのですね。

鈴木 ええ、強く思いました。変えるためには二つ方法があります。一つは官僚として偉くなる、もう一つは政治家になって官僚の仕組みを変える。結果的に後者を選んだのは、官僚で偉くなるには時間がかかる、間に合わないと思ったからです。かつ、前者だと、経済産業省の範囲のことしかできない。特区に取り組んだ時、規制というのは、経済産業の分野だけでなく、教育や福祉などいろいろなところに存在しており、一つの省庁で解決できる問題ではないことを痛感していました。「人は仕組みに依存する」という部分が大いにあります。仕組みを変える方に回らないと本当の改革はないと、政治の世界へ飛び込む決意をしたわけです。

「もったいない三重」を変えたい

高井 そういった熱意をもって臨まれた衆議院選挙は、残念ながら落選という結果でしたね。

鈴木 そこがある意味、私らしいのです。そこでくじけるかと思いきやとね（笑）。これはおそらく私の長所だと思うのですが、どうも「鈍感力」というパワーを持っているようです。国政選挙は三重から出馬したわけですが、祖父が三重県の菰野町の出身で私の本籍地がそこだという縁はありますが、いわゆる広い意味での落下傘候補(注1)です。ですから落選後、「鈴木英敬は、政治の道を三重でやるのはあきらめて、どこかに行くなり何かをするのではないか」と思っていた人も多かったと思うのですが、私は鈍感力を発揮し、この場所で次も打って出るぞとそのまま居座り続けたわけです（笑）。その思いの根幹にあったのが、「三重県、

(注1) 主に地方区制の国政選挙や都道府県知事選挙で、その土地にゆかりがない人間が候補すること。知らない土地から突如舞い降りてくるという落下傘（パラシュート）のイメージから、そう呼ばれる。



もったいないな」という思いでした。

高井 もったいないとは。

鈴木 私は特区プロジェクトで全国津々浦々を回り、いろいろな地域を見聞しましたが、その中でも、三重県のように、食、人、風景など、世界に誇れる実にいいものが豊富にあるところはそうはありません。しかし残念ながらその素晴らしさは、日本全国、まして世界中には届いていません。このもったいない状況を何とか変えたいと思ったのです。先ほど、「仕組みを変える側として政治の道を」という話をしましたが、仕組みの重要な要素として「住民参加」は不可欠で、これがいかにかうまく組み込まれているかが非常に大きなポイントだと思っています。行政だけで地域を良くするのは不可能で、住民自らが、自分たちの手で自分たちの地域を良くしたという実感が達成感を生み、幸せを感じるもとなれると思うのです。そのためには、まず自分たちの地域がいいところだと共感し合うことが大切です。人間というのは、共感したら、それをもっと良くしよう、誰かに伝えようという行動に出ます。落選後、次の国政選挙を狙ってはいたのですが、三重でいろいろな活動をするなかで、「共感するきっかけをつくるために三重県をPRしたい」という思いがふつふつと込み上げてきたわけです。

高井 そこにちょうど三重県の知事選挙があったわけですね。

鈴木 まさにそうです。情報の強力な伝達源となってくれる東京や大阪のビジネスマンたちには、生のままの情報では伝わりにくい。兵庫で生まれ東京で過ごした経験を持つ自分が、他地域から来たこ

とを逆に活かして、地域の面白い人たちと一緒に取り組むことで、もったいない三重を変えられるのではないかと。鈴鹿市で私を応援してくれていた人生の先輩たちからも、「英敬ちゃん、知事さんになってよ。」と言ってもらったりもし、その声にも背中を押され、知事選に立候補させてもらいました。

「幸福実感日本一」への挑戦

高井 三重県に惚れたことが、最大の当選理由だったかもしれませんね。では、鈴木知事が考えておられる地域を良くする仕組みを教えてくださいませんか。

鈴木 これは三重県に限ったことではなく、日本人は今、自信を失っているように思います。自信のない社会がいいものを生み出すことはできません。もう一度自信を取り戻すために、今、日本人に必要なことは、新しい豊かさを感じる尺度を持つことだと思うのです。今の日本人は、物質面の豊かさに内面の幸福感が伴っていないと言われますが、私は、幸せを実感できる共通項の一つが「存在価値を認められること」だと思っています。私自身、落選中の身を経験しているので特にそう思うのですが、人のお役に立っている、自分が誰かのために存在しているということを感じた時に、人は幸せだと感じる。そういう社会、仕組みを三重県でつくろうじゃないかと掲げた戦略計画が、「みえ県民力ビジョン」です。自分のため、あるいは誰かのために、家族や地域の中で自分のできることに取り組み、幸福を実感することができる。そんな人達を「アクティブ・シチズン」と呼んでいます。三重県民にはそうあって欲しいと思っています。そしてアクティブ・シチズンである県民みんなが「協創」の三重県づくりを行っていくことで、幸福実感日本一を実現していきたい。取り組むコンテンツは何でもいい。観光でもいいし、福祉でもいい、自分の家の農作物を売ることでいいのです。

高井 ポイントは、一人でやるのではなく、誰か

と何かを一緒につくり出すということですね。

鈴木 その方が、絶対に面白いでしょう。今、三重県で取り組んでいる政策体系づくりは、アクティブ・シチズンたちが協創しやすいことを考えた仕組みづくりなのです。行政が押し付けて何かするより、参加してもらって事業を成り立たせる方が幸福を実感できるでしょう。

日本初の企業投資促進制度 「マイレージ制度」

高井 なるほど。目指すビジョンはとてもよくわかりました。そのなかで、県として特に強化を図りたいものとして、「観光と産業振興」、「防災」、「子供を守る」を三本の柱として考えておられるそうですね。今回は特に、「観光と産業振興」と「防災」についてお話をお聞かせください。観光については、特に三重県らしさを象徴するコンテンツだと思いますので、後程ゆっくり伺うとして、まず、産業振興について。日本初となる「マイレージ制度」を導入されたといいますがどのようなものでしょうか。

鈴木 三重県には、ホンダに代表される自動車関係、シャープのような電気・電子関係、コンビナートなどの石油化学関係があり、この3業種で三重県の製造業の約7割を占めています。つまり、どれかがダメになると県の産業全体が落ち込むわけです。これでは雇用を安定して守ることはできません。そこで、環境エネルギーやライフイノベーション総合特区による医療・福祉分野など、新しい産業の柱を立てていくということに、今、特に力を入れてやっています。既存の産業に加え、そういった新産業の振興を目指すうえで、よく自治体に取り組むのが企業誘致です。三重県にも、以前からそのための支援制度がありました。しかし、それは120億円以上の投資には補助金を出すというもの。三重県に限らず、一般的な企業誘致のた

めの支援制度というのは何百億円単位という大型投資に対してのものです。一方で、現実にあるのは小規模の投資で、「5億円以下の投資」が5年前は4割、2011年度には約6割でした。そういった小規模の投資を応援することが、三重県での設備投資が増えたり、県民の雇用が守られたりということにつながるのです。そこで、5年間で合計5億円の投資が行われれば支援するという企業投資促進制度の「マイレージ制度」を導入したのです。例えば、1年目は3億円、2年空けて1億円、5年目にさらに1億円というように、5年で5億円以上になれば15%の支援をするというものです。さらに、障害者法定雇用率が達成されたら5年を6年にします。つまり、飛行機のマイレージが溜まっていくのと同じように、小規模投資をポイント化して一定水準に達した場合に補助対象とする投資促進制度を、2013年3月に全国で初めて創設しました。これは、実は新規産業だけを狙っているのではなくて、既存の企業においても少しでも投資をしてもらい雇用を守っていくことも重要視した制度です。

「防災の日常化」をいかに浸透させるか

高井 三本の柱の一つである「防災」では、今年の3月に南海トラフ地震^(注2)の被害想定が公表されましたが、特に三重県は備えなければいけないことがたくさんありますね。そういう点では、三重県の例が他県の参考になるかと思うのですが、どのような取り組みを考えておられるのでしょうか。

鈴木 最近の南海トラフ地震の想定では、全国で220兆円の経済被害のうち、三重県が16.9兆円。避難民の数は三重県で69万人です。69万人というのは、三重県民の3人に1人の数です。東日本大震災でも最大時の避難者数が47万人ですから、三重県だけでそれを20万人超えるというのはまさに想像を絶するものです。ただ、恐れてばかりいて

(注2) 駿河湾から四国沖に延びる海溝(トラフ)の名称。海側の岩板が陸側の岩板の下に沈み込む境界にあり、1600年代以降だけでもマグニチュード(M)7~8級の地震が繰り返し起きている。内閣府中央防災会議の有識者会議は、東日本大震災と同じM9級の地震が発生した場合、30都府県で最大32万3000人が死亡、経済被害は220兆3000億円との想定を公表(2012年8月・2013年3月)した。新想定地震発生確率は極めて低いが、東日本大震災が想定を大きく超えた教訓から、考えられる最大の被害を推計している。

は何もできません。今回出た数字は、科学による最新の知見として、千年に一度、あるいは万年に一度を考えたもの。もちろん高台移転などは参考にしますが、実際に100年、150年といったスパンで三重県にきた地震の中でも大規模な、例えば1498年の明応地震、1707年の宝永地震クラスのものに対し、まず、そこをレベル1としてしっかりハードとソフトで対応できる体制を整えることが大事だと思っています。

高井 ソフト面でいうと、三重県の住民の方の意識は結構高いのでしょうか。

鈴木 自主防災組織の組織率や訓練の参加率などは高まってきていますが、アンケートをとると、東日本大震災から1年経った時点で、すでに風化が始まっていることがわかりました。2012年9月のアンケートで、変わらず高い防災意識を持っている人は39%、防災意識の薄れを自身で感じている人が42%でした。これは非常に危ない状況です。そこで、「防災の日常化」をキーワードに、防災というのは特別なことではないことを訴え、家具の固定、家族で日頃から災害が発生した時にどうするかなどを話し合っておくなど、日々の暮らしの中での防災意識を高める活動を、県が主導して展開しています。

「実はそれ、ぜんぶ三重なんです！」を全国に、そして世界に発信

高井 では、いよいよ観光について。今年は、何と言っても20年に一度の伊勢神宮の式年遷宮^(注3)の年ですね。

鈴木 ええ。おそらく今年は、神宮に参拝に来られる方だけで1千万人になるでしょう。それだけの方に喜んでいただくことを考えるとプレッシャーでもあります。加えて、実は来年が熊野古道の世界遺産登録の10周年で、メモリアルな年が続くわけです。つまり、最初にお話しした三重のもっ

たいなさを一気に払拭する最大のチャンスでもありますから、これから3年間、大々的に三重県を強力にPRする観光キャンペーンをやります。私自身もとても意気込んでいて、どこでも何でも三重県を売り込もうと戦闘態勢です。キャッチフレーズもズバリ、「実はそれ、ぜんぶ三重なんです！」とし、いいものと三重県のイメージがしっかりと



結びつくよう展開しています。そして、戦略の方向性として考えているのが、三重県と他の中部圏地域との「協創」です。

高井 なるほど、ここでも「協創」なんですね。具体的に言うとどういうことですか？

鈴木 三重県は県内に新幹線の駅もなければ空港もない。もちろん、セントレアが僕らの空港だと思っはいますが、やはり観光も広域で考えていかなければいけない。中部圏全体で取り組んでいる昇龍道プロジェクトなどもそうですが、今年は三重県は遷宮だからといって、我が県だけが観光振興を図れば良いというのではなく、中部圏全体で儲かるような仕組みにしていきたい。伊勢神宮に来たら、愛知や岐阜の観光地へも行くという形にしていきたいと思っています。

高井 交通の利便性ということでは、三重県は南北に長く、中部にある伊勢・志摩は比較的行きやすいですが、熊野など南部地域は、魅力はたくさんあるのに行きにくくなっていますね。その点についてはどうですか。

(注3) 伊勢神宮では20年に一度、内宮（皇大神宮）と外宮（豊受大神宮）の正殿（しょうでん）をはじめ御垣内（みかきうち）の建物すべてを建て替えし、さらに殿内の御装束（おんしょうぞく）や神宝を新調して、御神体を新宮へ遷（うつ）す。記録によると、飛鳥時代の天武天皇が定め、持統天皇の治世の690年に第1回が行われたとされる。2013年は「第62回式年遷宮」の年。

鈴木 高速道路が今年の3月24日には紀伊長島まで開通し、2013年度中には熊野市の大泊^{おおどまり}までつながります。それらを活用していくのですが、それらは、観光というよりむしろ救命救急など「命の道」として整備したものです。私は、観光に関しては、何でもかんでも便利でなければいけないということではないと思っています。海外旅行を考えていただければわかると思うのですが、そこに行きたければ、多少の移動距離があっても行きますよね。確かに利便性は大事ですが、それ以上に、その場所の魅力を育み、その魅力を発信することの方がより大事だと考えています。

平和の象徴である「伊勢神宮」

高井 おそらく伊勢神宮には、そうした「場所の魅力性」は、特に海外からの観光客にとって、最大の魅力がありますね。

鈴木 そう思います。特に今年の遷宮は、観光資源としても特別な意味を持つでしょうね。もっと言えば、その特別な意味を日本国内にもいっそう発信していかなければならないと思っているところです。これから世界がグローバル化を加速させていくなかで、日本人が世界で生き残っていく、あるいは価値を生み出していくためには、真の国際人になることが必要です。私は、真の国際人たるためには、「真の日本人」としてのアイデンティティーをしっかりと持つ必要があると考えています。外国人と話をしてよく感じるのは、彼らは自分の国の歴史や文化、自分たちの郷土への思いをはっきりと持って、語れること。残念ながら、今の日本人はそこが弱い。ぜひ、日本人の心のふるさとである伊勢神宮に来て、日本人のアイデンティティーの原点を見つめてほしいのです。そして、大きな夢としては、20年後の次の遷宮には、ユダヤ教のエルサレム、イスラム教のメッカ、仏教のアンコールワット、カトリックのバチカンといった世界の聖地と並ぶ存在として、世界から尊敬され、多くの人に来ていただける伊勢神宮、そんな伊勢神宮を持つ三重県にしていきたいと思っています。

ます。

高井 壮大な夢ですね。しかしそうなってもおかしくない存在がお伊勢さんだということですね。

鈴木 その通りです。ご存じない方も多いのですが、伊勢神宮というのは、実は、自分の願いをお願いに行くところではなく、国の平和や繁栄を祈るところです。三重県に来てそれを教えてもらった時、そういう場所があることが、日本人として素直にうれしいと思いました。伊勢神宮というのは、まさに平和を象徴する存在なのです。遷宮は1,300年続いていますが、第二次世界大戦の時と戦国時代の時だけは行われませんでした。遷宮が行われるということは平和であるということ。ぜひ、より多くの方に今年の素晴らしい遷宮の様子を見ていただいて、その意味を感じていただきたいですね。

観光施設の第三者評価は、日本の観光事業の急務

高井 知事は、観光の第三者評価の必要性についても考えておられますね。

鈴木 観光振興を進めようという国で、そうした制度があまり確立していないのは日本だけです。世界各国は、みな第三者評価の制度を持っており、それに基づいて宿泊施設などが評価され、その結果をもとに良いところを伸ばし悪いところを改善しながら、どんどん質が上がっていています。

高井 日本においては、中部圏社会経済研究所が観光品質認証制度の研究を行っています。

鈴木 一昨年それを公表されたことを知り、よくぞ取り組んでいただけたと、本当にうれしかったですね。いくら自分たちでいいサービスだ、いいおもてなしだと思っても、本当にそれが満足いただけるレベルに達しているのかどうかは、客観的に評価をしていただいて初めてわかるものです。観光業者の中には抵抗もあるようですが、必ずやこれは自分たちのためになる取り組みです。第三者評価制度の確立は日本の観光にとって急務であり、三重県としては第三者評価によるガイド

ブックづくりに強い関心を寄せています。中部圏社会経済研究所さんのように取り組んでいただいているところへの応援をしていきたいと考えています。

知事業務もプライベートも「1分の1」を大事にしたい

高井 最後に、ご自身のことについてですが、鈴木知事は、本当にエネルギーで元気の塊のようなパワーをお持ちですが、そのパワーの源は何ですか。

鈴木 三つありますね。一つは睡眠時間を確保するという事です。だいたい12時前には寝て5時台には起きるというパターンで1日6時間は寝ています。健康であるということは、本当に大切な要素です。知事になる時に、安倍政権下で一緒に仕事をしたある有識者の方からいただいたアドバイスが、「君は政治家としての実績がないので、スモールサクセスをたくさんつくって信頼を得ることに努めなさい。」ということでした。まさにそうだと思います、それをやるには元気じゃないといけないと肝に銘じています。二つ目は、違う分野で活躍している人や同世代の人と話す機会を、意図してつくっていること。三つ目は、「うまいもんを食べる」ということです。

高井 三重県に住んでいれば、肉も魚も美味しいものだらけですよ。

鈴木 そうなんです、敵も知らないといけませんから他の地域のものもよく食べますよ。「これ、うまい！ やるな。」というものに会おうと、三重県がこれに負けられないようにするにはどうしたらいいかという研究もします。

高井 食でいうと、三重県のライバルとしては特にどこですか。

鈴木 やはり、海産物が美味しいところでしょうね。例えば、かつおというと、ほとんどの人が気仙沼か高知を思い浮かべますよね。しかし、かつおの一本釣りとすることでいうと、三重県船籍の漁獲量が日本一なんです。ただ、かつおの水揚げ

港が三重県にないため、イメージとして「三重県=かつお」になっていない。そのあたりをうまくPRして、高知で出されているのと負けられないようなカツオが三重で食べられることをアピールしたいですね。

高井 「実は、そのカツオ、三重の船の一本釣りです」といった感じでしょうか。話は変わりますが、特技が結婚式の司会で、いままでに25組されたとか。

鈴木 これも、面白い仲間と何かを成し遂げたいというところが出発点です。出席するなら、挨拶より司会の方が楽しいですからね。いちばん心がけているのは、自分にとっては「25分の1」でも、本人たちにとっては「1分の1」なので、毎回、全力でやるということでしょうか。これは知事表彰でもそうで、年間に何百と表彰しますが、私にとっては「何百分の1」でも、もらう方にとっては、やはり「1分の1」ですから、毎回、全力で表彰します。私は「以下同文」が好きではないので、できるだけ全部読むようにしています。

高井 今、三重県知事という職務に全身全霊をかけて邁進中だと思いますが、もう少し長いスパンで考えた時の夢というのはどうですか。

鈴木 今、先の夢を考えるのは難しいですね。将来を過剰に不安視するのではなく、今を一所懸命生きる。それが自分の明るい未来にも、仲間の明るい未来にもつながると。ただ、プライベートなことと言うと、昨年、待望の息子ができました。考えてみれば、親父が知事で母親がオリンピックのメダリストですから、成長していく過程でいろいろなプレッシャーもあると思います。しかし、そういうものを跳ねのけて自分の思いを遂げられる、そんな男になってほしいと、毎日お風呂に入れながら思っています。それが、私の今のいちばん大きな夢かな。

高井 なんだか、私も鈴木知事のお子さんがそういうふうには育たれる姿を見たいと思ってしまいました。ぜひ、県民に愛されて、三重県がますます元気になるようなかじ取りをされますことを楽しみにしております。ありがとうございました。



Profile

鈴木 英敬 (すずき えいけい)

1974年兵庫県出身（本籍地は三重郡菰野町）

1993年私立灘高等学校卒業

1998年東京大学経済学部卒業後、通商産業省入省

2008年自由民主党三重県第二選挙区支部長

2011年より三重県知事

座右の銘は、「幸福とは、行為の結果であり、誰かが与えてくれるものではない。」（アリストテレス）

特技は、結婚式の司会（これまで披露宴の司会は25回）

●ひとロメモ

知事の「スモールサクセスをたくさんつくる」という言葉に、取材で体験したボルダリングを思い出しました。小さな突起を手掛かり足掛かりにして、コンクリートの壁をよじ登るスポーツです。ひとつのコースの攻略に成功すると、次のコースに挑みます。難度があがるとオーバーハングがきつくなり何回も落下しますが、攻略に成功すると全身を快感物質が駆け巡って、次の成功に挑もうという意欲が湧いてきます。

たった一人で壁にとりつき、自分の力だけでよじ登るのですが、アタック前には仲間と攻略法を検討したり、登っている最中は下からアドバイスを貰ったりします。多くの仲間を支えられて仕事に取り組む姿とイメージが重なります。

腕力で登ろうとするとすぐバテてしまいます。足掛かりを確保して足腰の踏ん張りで体を運ぶと、消耗が防げて確実に登れます。しかし、挑む気持ち揺らぐとときめん、すぐ落下してしまいます。コース攻略に成功するごとに、達成感がどんどん

大きくなって、自信が膨らんでいきます。

知事はうらやましくなるくらい、元気で熱い人でした。それは「幸福実感日本一」をはじめ、うかがったいろんな取り組みで着実にサクセスを積み上げ続けている実感があるからでしょう。それが知事にとって、壁を登りつづける大きな力になっているのだと思います。

ボルダリングでは、コース攻略成功に必要なものはただひとつ……あきらめない心でした。

.....

高井 一 (たかい はじめ)

東海テレビアナウンサー。1953年、京都府生まれ。同志社大学文学部新聞学科卒。1976年、東海テレビに入社。1997年、名古屋大学大学院多元数理科学研究科修了。現在、編成局アナウンス専門局長。

